

村上春樹文学における「逸脱」 —「象の消滅」における渡辺昇を中心に— 北京外国語大学 楊 炳菁

1. はじめに

初期村上春樹作品の特徴といえば、登場人物の無名化が常にあげられる。こうした無名化が特徴として読まれてきた初期作品群であるが、1985年に発表された短編小説「象の消滅」には、「渡辺昇」と名付けられた人物が登場した。これを前田愛氏の『文学テキスト入門』の結論で言えば、名付けられた人物こそ確固とした存在であり、交換不可能な重要な存在でもある。しかし「象の消滅」を読めばわかるように、「象の消滅事件」を中心に描かれたこの小説では、渡辺昇はさほど重要な人物とは言えない。彼は象の飼育係で、結局象とともに消滅してしまった。つまり、「象の消滅」における渡辺昇は、少なくとも表面から見れば代えがたい重要な存在ではなく、象の付属か、象と同質的な存在と言っていいだろう。そして、付けられた名前から言っても、「渡辺昇」はごく普通の名前のようで、特に深い意味が含まれているわけではないようである。つまり、「渡辺昇」という名前から「象の消滅」を解読するヒントも得られないと言っていいだろう。

以上の原因のためか、数多くの「象の消滅」論には、渡辺昇に焦点を絞って論ずるものがないようで、言い換えれば、現段階においては、研究者たちは渡辺昇という人物に対してそれほど関心を寄せていないようである。ただ、興味深いことに、「象の消滅」以後、「渡辺昇」という名は、わりと頻繁に村上春樹の小説に出ており、登場人物以外、小説のタイトルにも使われたこともある¹。この現象から言えば、登場人物の無名化という特徴を持つ村上春樹の初期作品には、「渡辺昇」の命名はおそらく村上春樹の気随な行為ではない。「渡辺昇」という名は特殊性を帯びるもの、または何か役割を果たすものだとは推測できる。勿論、これは「渡辺昇」という名前自身によってもたらされたものではない。なぜなら「渡辺昇」は簡単に別の名に替えられるものであり、名前のチェンジ、極端に言えば無名であっても小説の解読に特に影響を与えていないからである。言い換えれば、「渡辺昇」という名の特殊性、あるいはその役割は名前そのものによるのではなく、「渡辺昇」と呼ばれる登場人物の属性と深く関わっているのである。したがって、その特殊性と役割を明らかにするために、各小説における「渡辺昇」を解明するのが基本であり、必要な作業だと思われる。

本稿は「象の消滅」に出た渡辺昇を研究し、その性質と役割を解明するものである。これは「渡辺昇」を研究する重要な一環である一方、「象の消滅」は「渡辺昇」という名を有する人物が初めて登場した小説であるからである。つまり、「象の消滅」における渡辺昇はおそらく村上春樹が初めて「渡辺昇」を利用し、何らかの目的を果たそうとしたと思われるのである。

¹『夜のくもざる』（平凡社1991）所収「鉛筆削り（あるいは幸運としての渡辺昇①）」と「タイム・マシーン（あるいは幸運としての渡辺昇②）」である。

2. 渡辺昇の位置

「象の消滅」は一人称の「僕」によって語られた象と飼育係が象舎から突然消滅してしまった物語である。小説の前半は推理小説風に語られたので、読者も自然に「象の消滅事件」の解明に目が向いている。しかし、後半は完全に読者の予想を外れ、真相どころか、推理のプロセスにも触れずに終わったのである。そのためか、今までの「象の消滅」論は事件の解明ではなく、象または「僕」を中心に行われ、その結論は以下のようにまとめられる。「象の消滅」における象は、「時代および便宜的な社会に合わないものとして描かれているが、ここにおける便宜的な社会は高度発達の資本主義社会のことを指すのである」²。それに対して、「僕」は時代に合わない「僕」と便宜的な「僕」という二つの面を持っており、象の存在によって両者がバランスを保ったわけである。しかし、象の消滅によってバランスが崩れ、結局「僕」には便宜的な面しか残らなかったのである³。以上の結論からわかるように、象に焦点を絞って研究しても、「僕」を中心に解説を行なっても、いずれも高度発達の資本主義社会に対する批判という結論にたどり着き、両者の差異は高度発達の資本主義社会自体への批判か（象を中心に）、そのような社会の人間の破壊はいかなるものなのか（「僕」を中心に）というところだけにある。したがって、飼育係として登場した渡辺昇は「象の消滅」の主旨とさほど関連性のない人物のようで、無視されやすい存在と言っていいたいだろう。これを言い換えればつまり、もし「象の消滅」が推理小説であるなら、毎日象のそばにいる渡辺昇は容疑者か目撃者の可能性が高く、「象の消滅事件」を解明するには不可欠な存在となり、その登場も一定の合理性を示している。だが、前述したように、「象の消滅」は事件の真相を解明する推理小説ではなく、消滅した象あるいはバランスを崩した「僕」を通して高度発達の資本主義社会を批判する物語として読まれているために、飼育係の渡辺昇が象と同質的な存在として無視されやすいわけである。

内容から見れば、「象の消滅」における渡辺昇は確かに存在感の薄い人物だと言えよう。彼の登場は特に物語の進展に影響も与えないし、象のそばに終始付いているので読者の関心も彼ではなく、象に向いているのである。しかし、詳しく考察すれば、この人物は次のような不思議なところがあると思われる。まず、名前の必要性である。前述のように、象は商品になれないものの象徴と言える。しかし、たとえこのような象を通じて高度発達の資本主義社会に対して批判を行っていても、象の飼育係に「渡辺昇」という固有名をつける必要はないだろう。言い換えれば、今までの「象の消滅」論の結論から言えば、象の飼育係は実は名前の必要性がない存在である。次に、渡辺昇をめぐる描写である。「象の消滅事件」は大いに報道されたため、新聞やニュース記事にはおそらく飼育係の名前が自然に出てくるだろう。しかし、これは「象の消滅事件」を報道するた

² 関氷氷、楊炳菁（2013）《“我”与“象”的失踪——論村上春樹短篇〈象的失踪〉中的“我”》（「僕」と「象の消滅」——村上春樹短編小説「象の消滅」における「僕」について）《浙江外国语学院学报》5 浙江外国语学院 P72

³ 同 2 P77

めで、何もその人物をめぐって描写する必要はないだろう。したがって、小説にあった渡辺昇をめぐり描写はわずかでありながら、「象の消滅事件」そのものを越えたと言っていいだろう。

以上の二点から言えば、「象の消滅」に登場した渡辺昇は決して象の付属的な存在ではなく、むしろ作者によって意識的に造形された人物と言えよう。もしそうであるなら、独立した人物としての渡辺昇は「象の消滅」において、いかなる役割を果たしたのだろうか。

3. 渡辺昇に関する描写

渡辺昇の役割を究明するには彼の性質を明らかにする必要があり、小説における関連描写も整理する必要がある。小説には渡辺昇に関する描写が三箇所集中されている。一箇所は新聞記事の内容で、もう二箇所は「僕」の観察と、渡辺昇との簡単な対話である。三箇所の描写は次の表でまとめられる⁴。

	新聞記事	「僕」の観察と簡単な対話
出身	千葉県館山 (P47)	
年齢	63 歳 (P47)	正確な年齢はわからない (P44)
職業歴	長く動物園の哺乳類飼育係を勤め (P47)	
外見		肌は夏でも冬でも同じように赤黒く日焼けして、髪は固く短く、目は小さい。これとって特徴のある顔ではないのだが、左右に突き出したような格好の円形に近い耳だけが、顔全体が小さいぶんだけいやに目についた。(P44)
性格	温厚かつ誠実 (P47)	無愛想というわけではなく、誰かに話しかけられればきちんとそれに答えたり、物のいいようもしっかりとしていた。/原則としては、無口で孤独そうな老人 (P44) /笑って「長いつきあいですから」と答えてだけで、それ以上は何の説明も与えてくれなかった。(P45)
人間関係	その動物についての知識の豊富さと温厚かつ誠実な人柄とで関係者の信頼は篤かった。(P47)	子供たちのことが好きらしく、子供たちがくるとつとめて親切に振舞おうとしたが、子供たちの方はこの老人に対してあまり気を許そうとはしなかった。(P44)
婚姻状態		象舎にくっつくように建てられたプレハブの小屋で寝起きする (P44)

⁴ 本稿は『村上春樹全作品 1979～1989⑧短編集』（講談社 1991）に収録されたバージョンをテキストとし、小説からの引用はページ数だけを示す。

新聞記事より「僕」の方から提供された情報量のほうが圧倒的に多いことが以上の表から一目瞭然である。新聞記事には出身地、職業歴、同僚の評価などが入っているが、「僕」の観察は外見、性格、人間関係など多方面にわたっている。勿論同僚の評価は「象の消滅事件」と関係がないため、記事に出たのは多少不自然と思われるが、同僚の評価および「僕」の詳しい観察があるからこそ、渡辺昇は意識的に造形された人物だと言えよう。

以上の表からわかることの二点目として、新聞記事の内容と「僕」の観察および簡単な対話との間に異なった部分が多いことが挙げられる。勿論、これは新聞記事と「僕」との立場の違いによってもたらされたものだが、詳しく考察してみれば両者の差異は以下の五種類に分けられる。一、出身地や職業歴など、新聞記事にあったが、「僕」の観察にはなかった情報。二、婚姻状況、外見など、「僕」の観察にあったが、新聞記事にはなかった情報。三、年齢のような両方とも提供されたが、内実が異なっている情報。四、性格など、似ている部分もあれば、異なっている部分もある情報。五、人間関係のような正反対とも言える情報。

五種類の差異のうち、出身地、職業歴および正確な年齢などのような情報は、新聞記事として簡単に入手できるもので、逆にこれらはむしろ「僕」が提供できない、あるいは正確に判断できないものと言っていいだろう。それに対して、婚姻状況と外見などは「象の消滅事件」とあまりにも関係がなさそうだったので、新聞記事にはなかったが、「僕」にとっては自分の観察を通して簡単に把握できる情報と言えよう。要するに第一から第三種類の差異は立場の違いによってもたらされたもので、一定の合理性を示したわけである。そして第四種類の差異は性格を描写するものが主な内容で、新聞記事の「温厚」と「僕」の「無愛想ではない」との間に程度の差があるが、いずれもプラスの評価と言えよう。新聞記事と「僕」との間に最も顕著な差異が出たのは第五種類の情報である。つまり、渡辺昇は同僚の信頼を得たが、子供たちは彼に「気を許そうとはしなかった」ということである。言い換えれば、人間関係においては、同僚に評価された渡辺昇は子供たちのことが「好きらし」かったが、子供たちの信頼を得なかったようである。

以上の整理および分析から分かるように、渡辺昇に関する描写のうち、新聞記事の内容より、「僕」の方からより多くの情報が提供されている。そして、彼の人間関係をめぐっては、「僕」の観察と記事の表現との間に大きな差異が存在している。この二点は極めて重要なものである。というのは、「僕」にとっての渡辺昇の重要性がそこから読み取れる一方、人間関係をめぐる表現の差異も立場の相違性を表しているからである。

4. 渡辺昇の性質

ついでに報道された象の飼育係ではなく、渡辺昇は「僕」の観察対象であり、「僕」にとって注意を引かれる存在でもある。ただ、渡辺昇を観察する際、彼の人間関係については、「僕」の表現と同僚の評価との間に大きな差異が存在している。このような差異をどのように認識し、さらに

渡辺昇という人物の性質をどのように把握すれば良いのだろうか。

「僕」と渡辺昇との対話について、西田谷洋氏は『村上春樹のフィクション』で次のように論じたことがある。

「僕」が「どのようにして象に命令するのか？」と質問すると、飼育係は笑って「長いつきあいですから」とだけ答える。質問するのは「僕」には理解できなかった象と飼育係の交流を理解したいからだろう。しかし、この質問で象との関係を「命令」と表現したのは「僕」が「便宜的」に用いた言葉であろう。象と飼育係の関係は「長いつきあい」であるように様々な要素が混交しており、他者には便宜的な説明が難しいものでもあろう⁵。

西田谷氏は「言語表現と言及対象の間隔」を説明するために「象の消滅」における「僕」と渡辺昇との対話を例にしたわけである。「言語表現と言及対象の間隔」は確かに人間のコミュニケーションにおいては避けられぬ問題であるが、上記の例は別の状況を示していると思われる。

「動物についての知識の豊富さと温厚かつ誠実な人柄」という新聞記事から分かるように、渡辺昇は専門知識が豊かな人である。そして、「僕」から見ても、「無口」な渡辺昇は「誰かに話しかけられればきちんとそれに答えたとし、物のいいようもしっかりとしていた」。記事の内容と「僕」の観察から考えれば、言語表現と言及対象の間隔は確かに避けられないものとしてコミュニケーションの際に存在するが、専門知識が豊かで、しかも「物のいいようもしっかりとしていた」渡辺昇にとってはある程度乗り越えられるものだと思われる。だが、「長いつきあい」という回答は確かに西田氏の論じたように、「他者（ここでは「僕」のことを指している——筆者）に便宜的な説明が難しい」ことを表している。このような矛盾はおそらく次のようにしか解釈できないだろう。つまり、渡辺昇にとって、「僕」が聞いたのは専門的な質問で、このような専門的な質問に対する回答は「僕」のような専門以外の人にとっては難しすぎて、回答しにくいものである。つまり、いわゆる「他者」は、渡辺昇にとっては、普通の人間のことが飼育係という特定の従業者かで多大な差異があるものだと思われる。それでは、飼育係は一体どのような人たちのことだろうか。

山本茂行氏は『動物園というメディア』において、飼育係のことを次のように紹介している。

私が動物園にかかわり始めた二十数年前の「動物園人」の印象は強烈だった、懇親会などの席上でも動物を飼う話に一徹。社会の常識や仕組みや流れについては関心がなく、動物飼育という狭く深い世界で生きる特殊な集団。徒弟制度時代の職人集団のように見えた。（中略）動物園の先人たちは、経験を積み重ねることで独自の地平を動物園に作った。飼育のみならず、動物よろず相談所の窓口の機能も果たしてきた。「誰もができる仕事ではない」こと

⁵ 西田谷洋（2017）『村上春樹のフィクション』ひつじ書房P477

からの誇りも生まれ、職人氣質が醸成されるのは自然な成り行きであった。⁶

『動物園というメディア』は2000年に出版された著書で、「二十数年前の「動物園人」と言えば、「象の消滅」に登場した渡辺昇のような飼育係のことを指しているだろう。山本氏の紹介をもって渡辺昇に関する描写を考察すれば、次のようなことが理解できる。まず、新聞記事に出た「関係者の信頼は篤かった」における「関係者」は単に渡辺昇と関係のある普通の人のことではなく、『動物園というメディア』に言及された「動物園人」のことを指しているのだろう。また、「僕」の質問に対して、渡辺昇はなぜ「長いつきあいですから」としか答えなかったかという疑問に対する推測として、次のように解釈できる。おそらく渡辺昇から見れば、「僕」は到底彼とは異なった世界に属する人間で、こんな「僕」に対して説明してもうまく理解してはくれないだろう。つまり、動物を飼うことは「誰もができる仕事ではない」ゆえに、いかに動物と交流するかは「部内者」⁷の「動物園人」たちの話題で、「部外者」⁸の「僕」には理解しかねることだろう。

もし以上の推測が成立できれば、「僕」と渡辺昇とは異なる世界に属する人間ということがわかり、それによって渡辺昇に関する描写をさらに詳しく分析できると思われる。「象の消滅」における「僕」は便宜的な「僕」と時代に合わない「僕」という二つの面からできた人物で、象の消滅によって、便宜的な「僕」が圧勝したと言える。時代に合わない「僕」は世間に批判的な態度を示したが、これはあくまでも「ネクタイを外」(P51)す時に限られており、仕事に出た「僕」はむしろ歓迎された模範者と言っていいだろう。つまり、世間に対する「僕」の批判は徹底的なものではなく、「僕」という存在も世の中の秩序に嵌められたままである。一方、渡辺昇は「僕」とは根本的な違いを持っており、「僕」が属した世界とも無縁な存在といっていいだろう。したがって、「僕」から見れば、渡辺昇は「無口で孤独そうな老人」で、この「無口」の原因はまさに彼の周囲には「動物園人」がいなくて、「動物を飼う話に一徹」な彼は普通の人と話題の共有ができないからであろう。また、子供たちがくると、渡辺昇は「つとめて親切に振舞おうとしたが」、子供たちの方は彼に対して「あまり気を許そうとはしなかった」。すでに社会化された子供たちは当然世間の標準で渡辺昇を見ていて、普通の世界に属していない渡辺昇に対しては当然信頼できないだろう。さらに「象舎にくつつくように建てられたプレハブの小屋で寝起きする」渡辺昇は女性編集者と付き合う「僕」とは対照的に、一人暮らしをしており、婚姻制度にも無縁なものであることも分かる。要するに渡辺昇は一人の「動物園人」として、世間の標準を持って理解しようとしても到底理解できない存在と言っていいだろう。

「動物園人」のことについて、『動物園というメディア』では、「職人集団」および「職人氣質」で説明しているが、このような表現から分かるように、「動物園人」たちは世間離れの人々だけで

⁶ 山本茂行 (2000) 「曖昧な日本の動物園」 渡辺守雄ほか『動物園というメディア』 青弓社 P210-211

⁷ 同 6P210

⁸ 同 6P210

なく、前近代の世界に属している人間と言っても過言ではない。彼らは現代社会と異なった精神および制度を持っており、世間離れなどの特徴が彼らを恐れさせないどころか、むしろ「誰もができる仕事ではない」という誇りさえ生じさせたのである。渡辺昇はこのような性質を有する人間で、間違いなく「逸脱」の存在と言っていだろう。

ここにおける「逸脱」は「集団や社会の大多数の成員が守る規範や価値に同調しない行為の様相」⁹を指している。「象の消滅」では、「僕」は女性編集者に次のように言ったことがある。「どんな素晴らしいデザインのものも、まわりとのバランスが悪ければ死んでしまいます。」(P50) バランスを取ることは同調することを意味しており、現代社会の最も顕著な性格と言えよう。しかし、渡辺昇のような人は職人氣質を帯びており、「素晴らしさ」を追求するのが彼たちの価値観である。したがって、このような人は簡単に社会風潮に同調せず、当然世間から異質な存在と見られるだろう。要するに、渡辺昇の根本的な性質は「逸脱」でまとめられ、彼は「象の消滅」における「逸脱」の存在と言えよう。

5. 渡辺昇の役割

「象の消滅」における渡辺昇は逸脱の存在で、社会風潮に同調しないのが彼の性質である。それでは、このような渡辺昇はどのような役割を果たしたのだろうか。

筆者は「「象の消滅」における「僕」が観察した社会」という論文で、使用言語の違いによって登場人物を三種類に分けた。具体的に言えば、新聞、テレビなどを含めたマスメディア、町長、警察ならびに子供のことを心配する 37 歳の母親などは一種類で、女性編集者はもう一種類である。彼らは象の「消滅」に対して、それぞれ「失踪」と「消える」を使ったが、それと対照的に、「僕」は女性編集者との対話以外、終始「消滅」を使った。使用言語の差異は「象の消滅事件」に対する異なる態度を表すもので、「象の消滅」はまさに「象の消滅事件」を座標に高度発達の資本主義社会の全体図を描いたものと言える¹⁰。以上の分類は「象の消滅」に登場したほとんどの人物を網羅したが、渡辺昇はその例外である。渡辺昇を除外したのは彼が象とともに消滅したためで、「象の消滅事件」に対して態度を表明しなかったからである。しかし、逸脱の角度から言えば、渡辺昇は「象の消滅」においては最も特殊な存在ではないだろうか。つまり、「僕」を含めた登場人物は「象の消滅事件」に対して異なった態度を示したが、いずれも社会の一員であり、社会秩序にコントロールされているのである。だが、逸脱の存在である渡辺昇は、社会秩序を離れていると言っていだろう。このような逸脱の存在として登場した渡辺昇は「象の消滅」においては何も役に立たないように思われがちだが、果たしてそうだったのだろうか。

村上春樹は「ファミリー・アフェア」における渡辺昇について、次のように解説したことがあ

⁹ アンソニー・ギデンズ著、松尾精文など訳 (2004) 「用語解説」『社会学 (第 4 版)』而立書房 P2

¹⁰ 楊炳菁、関氷氷 (2014) 《論〈象的失踪〉中“我”所觀察的社会》(「象の消滅」における「僕」が観察した社会)《日語学習与研究》6 对外経済貿易大学 P87-93 参照。

る。

渡辺昇という名前が力を持った例ですね（中略）「ファミリー・アフェア」における渡辺昇はありありとした現実の存在だし、まあ異物ですね。名前を与えられたことによって異物としての機能を身につけたんです。彼の登場によって「僕」という主人公が微妙に揺らぐんですね。その辺が僕自身書いていてわりに新鮮だったような気がするんです。/そういう異物を含んだ状況というのは書いてみたいと思うし、だんだん書けるようになってくるんじゃないかな。これまでは僕の描きたいというものの視野にそういうものがあまり入ってこなかったということなんですけどね。そういうものが入ってこないところで自分の独自の小説世界みたいなものを作っていきたかった。でも正直言ってそろそろそれだけでは足りない気がしてきているしね。もっといろんなものを対立させてみたいとは思います。僕自身刺激がほしいですね。¹¹

以上の村上春樹の解説から分かるように、「ファミリー・アフェア」に登場した渡辺昇は現実性のある人物だが、「異物」のような存在である。彼は「僕」と対立し、「僕」の心に揺らぎをもたらただけでなく、小説の世界も広げたわけである。これがまさに「ファミリー・アフェア」における渡辺昇の役割と言えよう。一方、村上春樹が告白したように、このような「異物」は「だんだん書けるようになってくる」もので、「ファミリー・アフェア」における渡辺昇はよりよく自分の目的を達成した人物である。

村上春樹の発言をもって「象の消滅」を考察すれば、逸脱の存在として登場した飼育係の渡辺昇もある意味では「異物」のようなものであろう。しかし、「象の消滅」においては、渡辺昇の登場がさほど明白に「僕」を動揺させていないようである。したがって、この渡辺昇は、「ファミリー・アフェア」における渡辺昇のように「僕」とは対立しなかったのである。言い換えれば、「象の消滅」における渡辺昇は確かに逸脱の存在として登場し、「異物」のようなものと言っていいだろうが、小説の世界を広げたわけではないのである。これは創作の失敗とは言えなくても、登場人物の不鮮明な例としてあげられると思われる。だが、「渡辺昇」は「だんだん書けるようになってくる」ものである。たとえ「象の消滅」における渡辺昇が小説の世界を広げていかなくても、逸脱の存在であり、「異物」の特徴も備えている。また、この初めて登場した渡辺昇は社会風潮に同調しないが故に、社会と対立しているとも言えよう。この点について、「僕」の目に映った彼ら（象と渡辺昇）の消滅から読み取れる。「象と飼育係は自分たちを巻きこまんとしている——あるいはもう既に一部を巻きこんでいる——その新しい体系に喜んで身を委ねているように僕には思えた。」（P59）渡辺昇自身に関する描写ではなく、幾分「僕」の想像も入っているようだが、象と

¹¹ 村上春樹、柴田元幸（1989）「山羊さん郵便みたいに迷路化した世界の中で」『ユリイカ臨時増刊』8 青土社 P14-15

もに「新しい体系に喜んで身を委ねる」ことはおそらく今の社会に対する渡辺昇の嫌悪と投げ棄てを表しているのだろう。象とともに消滅したのは、社会に同調しない渡辺昇の価値判断であり、逸脱の存在である彼の必然的な運命であろう。

6. おわりに

「象の消滅」における渡辺昇は逸脱の存在であり、社会に同調しない「異物」でもある。これは彼の性質で、小説における役割とも言える。ただ、もし「渡辺昇」という名が何回も村上春樹の小説に出てこなければ、「渡辺昇」は研究対象になることも難しいし、「象の消滅」における渡辺昇も読者の注意を引けないだろう。そして、「象の消滅」の主旨から言えば、渡辺昇はさほど重要な人物とは言えない。したがって、「象の消滅」における渡辺昇に関する描写は完全に成功とは言えないだろう。しかし、これは「渡辺昇」という名を有する人物が初めて登場した小説で、この人物こそ逸脱の存在であることを指摘したい。「象の消滅」における渡辺昇に対する研究は、その後系列的に登場した「渡辺昇」の研究の一環として、基礎を築きあげていくだろう

テキスト

村上春樹（1991）『村上春樹全作品 1979～1989⑧短編集』講談社

参考文献

アンソニー・ギデンズ著、松尾精文など訳（2004）「用語解説」『社会学（第4版）』而立書房

西田谷洋（2017）『村上春樹のフィクション』ひつじ書房

村上春樹、柴田元幸（1989）「山羊さん郵便みたいこ迷路化した世界の中で」『ユリイカ臨時増刊』8 青土社

山本茂行（2000）「曖昧な日本の動物園」渡辺守雄ほか『動物園というメディア』青弓社

関氷氷、楊炳菁（2013）《“我”与“象”的失踪——論村上春樹短篇〈象的失踪〉中的“我”》（「僕」と「象の消滅」—村上春樹短編小説「象の消滅」における「僕」について）《浙江外国語学院学報》5 浙江外国語学院

楊炳菁、関氷氷（2014）《論〈象的失踪〉中“我”所觀察的社会》（「象の消滅」における「僕」が觀察した社会）《日語学習与研究》6 对外經濟貿易大学